

プリンゼイジの豊太郎

『舞姫』の太田豊太郎は、ドイツ留学を終えて、帰国の途上にあつたサイゴンで手記を認める。「人知らぬ恨に頭」を悩ましている豊太郎が手記のはじめに書き記したのは、帰国に際して買い求めた日記が、今に至るまで空白のままに放置されてきた事実であつた。「こたびは途に上りしとき、日記ものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のままなるは」。さらに豊太郎は、日記に一文字も書き記すことができない時間が三週間の長きにわたっていることを告白する。「ああ、プリンゼイシイの港を出でてより、早や二十日あまりを経ぬ」。

豊太郎からことばを奪っていたのは、「人知らぬ恨」である。ドイツ留学時代に淵源するこの「恨」に占領され、豊太郎の心は凍結状態にある。目前に迫った帰国の日までに、こうした状況から抜け出さなければならぬ。豊太郎はそのため、あえて自分自身と対峙

—

することを選択する。

ああ、いかにしてかこの恨を銷せむ。もし外の恨なりせば、詩に詠じ歌によめる後は心地すがすがしくもなりなむ。これのみは余りに深く我心に彫りつけられたればさはあらじと思へど、今宵はあたりに人もなし、房奴の来て電気線の鍵を振るにはなほほどもあるべければ、いで、その概略を文に綴りて見む。

「人知らぬ恨」が何によつてもたらされたものなのか。言い換えれば、五年にわたる留学時代に豊太郎の身に起こったことは何だったのか。豊太郎は、ドイツ留学の日々を語ることを紡ぎ出すという難題に立ち向おうとしていた。

ところで、この冒頭の一節で注目しておきたいことがある。それは「プリンゼイシイの港を出でてより」と帰国の途についた場所が明示されていることだ。なぜ、イタリアのプリンゼイジとわざわざ具

小仲信孝

体的な地名をあげているのか。プリンディジを帰国の際の離欧の地と記すことに何らかの意図があったのか。旅程を特定させるような情報を読者に提供しなければならなかった理由はどこにあるのか、気になるころである。

もちろん、プリンディジという地名に特別な意味はない、拘る必要はない、という意見もあるかもしれない。いうまでもなく『舞姫』は、太田豊太郎の手記という形をとっているとはいえず、森鷗外によつて執筆された小説すなわち虚構であつて、ドキュメントではない。虚構である以上、離欧の地をどこに設定するかは作者の任意である。が、ここでプリンディジという地名に拘っているのはほかでもない。『舞姫』が鷗外によつて執筆された小説であるからなのだ。

『舞姫』が鷗外のドイツ留学体験を素材にしていることは、いまさら確認するまでもないだろう。虚構とはいえず、作品の多くの部分が作者の実体験を下敷きにしている。鷗外の実人生と切り離しては考えられないことを、『舞姫』の読者は知っているはずである。鷗外自身はドイツ留学に際して、往路においても帰路においてもプリンディジを経由した事実はない。だからこそ、離欧の地としてプリンディジが選ばれていることが気になるのだ。『舞姫』の背景を知る読者なら、プリンディジという設定を唐突に感じないだろうか。

鷗外がドイツ留学した際の旅程を確認しておこう。
先ずは往路から。明治十七年八月二十三日、東京を発ち、汽車で横浜へ。翌二十四日、フランスの郵船メンザレエ号で出港した。途中、香港、サイゴン、シンガポール、セイロン島コロomboに寄港。

アラビア海に入りアデンへ。紅海を進み、スエズ運河を経てポートサイドへ。地中海に入るとシチリア海峡を通過して、十月七日、フランスのマルセイユ港に到着している。そこからは汽車でパリへ。ケルン経由でベルリンに到着したのは十一日夜であつた。

帰路については、ほぼ往路の逆コースを辿っている。石黒忠恵軍医監に随行する旅となつたためベルリンからアムステルダム、ロンドンを經由してパリへ。離欧の地は往路と同じマルセイユである。以後の旅程は、アレキサンドリア、ポートサイド、アデン、コロombo、シンガポール、サイゴン、香港、上海に寄港。神戸を經由して、明治二十一年九月八日の早朝、横浜に入港している。

ヨーロッパでの発着港はいずれもマルセイユである。アドリア海に面したプリンディジは実際のルートにはない。鷗外の渡欧体験はこの一回のみであり、したがってプリンディジは鷗外にとって未踏の地にはかならない。にもかかわらず、なぜプリンディジなのか。

豊太郎の帰路が鷗外の行程通りマルセイユ発ならば、当時の洋行事情から見て違和感はなかつただろう。幕末、明治期から昭和初期にかけて、ヨーロッパを旅した日本人にとって、ヨーロッパの玄関口といえはフランス第一の港町マルセイユかイタリヤのナポリであつたからである。

慶応三年（一八六七）のパリ万国博覧会に兄徳川慶喜の代理として参加し、のち親善大使としてヨーロッパ各国を巡つた徳川昭武一行の場合を見てもよい。

慶応三年一月十一日（二月十五日）、フランス郵船アルフェ号で

横浜から旅立った一行は、上海、香港、サイゴン、シンガポール、セイロン島のガル、アデンを経て、二月二十一日（三月二十六日）、スエズに着いた。ここからアレキサンドリアまでは汽車の旅である。当時、東アジアからヨーロッパをめざすには、喜望峰を迂回するルートか、スエズに上陸し、陸路で地中海に出るルートしかなかった。スエズ運河はまだ開削中であり、完成するのは一八六九年のことである。

アレキサンドリアからは再び船でシシリー島のメッシーナに寄港。マルセイユに到着したのは慶応三年二月二十九日（四月三日）、横浜を出帆して四十八日目のことであった。

明治に入って、岩倉使節団はどうか。岩倉具視を全権大使として、欧米視察のため明治政府が派遣した岩倉使節団は明治四年十一月十二日（十二月二十三日）、サンフランシスコをめざして横浜を出航した。アメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン、イタリア、オーストリア、スイスの十二カ国を回覧し、明治六年九月十三日、横浜に帰港した。

帰路の航海の起点となったのは、やはりマルセイユである。ナポリ、ポルトサイド、スエズ運河を通じて、以後の経路はアデン、ガル、シンガポール、サイゴン、香港、上海、長崎、横浜。徳川昭武一行のルートをほぼ逆に辿った形である。

もう一例見ておこう。明治五年から六年にかけて東本願寺法主現如上人に随行してフランス、イタリア、イギリス、アメリカを漫遊

した成島柳北である。現如上人と柳北の一行五人は明治五年九月十四日にフランス郵船ゴンダベレイ号で横浜を出航。途中、香港でマルセイユ行の定期船に乗りかえてヨーロッパに向かった。開通したばかりのスエズ運河を通過し、マルセイユに到着したのは十一月一日のことであった。

マルセイユを発着港とした例は、このほかにも多い。文学者と文人に限ってみても、末広鉄腸、与謝野寛、三宅克己、島崎藤村、河東碧梧桐、斎藤茂吉、漫画家の近藤浩一路、登張竹風、和辻哲郎、林芙美子、横光利一などが挙げられる。中には、通常四十日余りの横浜、マルセイユ間を一年以上かけて渡った金子光晴・森三千代夫妻などもいる。真銅正宏『近代旅行記の中のイタリア』（学術出版会、平成23年12月）が「明治から昭和初期にかけて、多くの日本人がヨーロッパに渡った道筋は、インド洋から紅海を経て地中海に抜ける船の長旅であった。このルートは、フランスのマルセイユに上陸し、鉄道でパリに向かうものが多かった」と指摘している通りの状況だったのだ。

二

一方、プリンディジはどうか。プリンディジを離欧の地とした事例はほとんど見当たらない。確認できるものとしては、評論家で英学者、児童文学者でもあった桜井鷗村の欧州旅行がある。『肉弾』の作者桜井忠温の兄である鷗村は明治四十一年に欧州へ出発した。

『近代旅行記の中のイタリア』によれば、鷗村はイタリアを訪れた際、スイスから「サン、ゴッタール大隧道」（ゴッタールド・トンネル）を通りミラノに入るといふ、海路ではないもうひとつの代表的なルートを選んでいる。ミラノからヴェニス、フィレンツェ、ローマ、ナポリを巡った後、鷗村はプリンディジへと向う。エジプトのポトサイドに渡り、そこから帰国の途につくためである。

これは珍しい事例といつていいであろう。ただし真銅は、鷗村にとって「ナポリがヨーロッパとの別れの「境界」であった」として、プリンディジはあくまで寄港地の位置づけである。和田博文『海の上の世界地図』（岩波書店、平成28年1月）には、幕末から戦後に至るまで日本人の欧州航路の旅の記録が数多く紹介されているが、そこにもプリンディジを発着港とした事例は見当たらない。プリンディジを経由するのは極く限られた場合と見てもよさそうである。

もちろん、プリンディジを訪れた日本人がいなかったわけではない。たとえば明治三十一年に慶應義塾塾長に就任した鎌田栄吉である。鎌田は明治二十九年三月から一年九ヶ月をかけて欧米視察の旅に出たが、イタリア歴遊の際、プリンディジを訪れたことが『欧米漫遊雑記』（博文館、明治32年6月）に記されている。また、大正十三年九月から大正十五年二月までヨーロッパ旅行をした漱石門下の安倍能成もプリンディジを訪れた一人である。その著『西遊抄』（小山書店、昭和19年7月）によって確認できる。因みに安倍のヨーロッパへの上陸地はマルセイユである。

とはいえ、イタリアを旅した多くの日本人が訪問したのは、ナポリ、ローマ、フィレンツェ、ジェノバ、ミラノ、ヴェネツィアなどの著名な都市であったことを確認しておく必要がある。上海・香港・シンガポール・コロンボ・スエズ・ポトサイドを経由してマルセイユに至り、さらにロンドン・アントワープへと向かう欧州航路から外れているプリンディジは、当時の日本人にとっては訪れることも稀な、馴染みの薄い場所だったといわねばならないだろう。

しかし一方、豊太郎の出航地がプリンディジと設定されていることを、むしろ必然的とする意見もある。中川浩一「プリンディシイ」推究（『鷗外』35号、昭和59年7月）は、「歴史交通地理的見地」からプリンディジの役割に注目する。古代ローマ史と深い関わりをもつプリンディジは、一八六九年十月のスエズ運河の開通によって、ヨーロッパアジア航路の重要拠点となる。翌一八七〇年十二月には「インド半島を付根の部分でカットするボンベイ―カルカタ間鉄道」が開通したことも加わって、プリンディジはアジア航路の発着点として「最も至便の地」と位置づけられることとなった。一八七〇年、イギリスのP&O汽船がプリンディジを拠点港に選定した理由もそこにあつた。

そうした状況に鑑みれば、豊太郎を含む天方伯一行がプリンディジからエジプトへとという航路を選んだ理由は明らかだと中川は指摘する。

イタリア観光に必ず含まれるはずのローマから、フランス郵

船の拠点港であるマルセイユにおもむくの比べ、プリンディジへ足を運ぶほうが、時間と費用の双方からみて、はるかに有効適切なわけである。

ジュール・ヴェルヌ『八十日間世界一周』（一八七二年刊）で、フィリアス・フォッグが無謀な世界一周旅行に挑戦するために、ロンドン、パリ、モン・スニ、プリンディジ経由を選んだのも、スエズ運河開通によって出現したアジアへの最短ルートであったからである。『八十日間世界一周』の中では、プリンディジがリバプール、グラスゴー、スエズ、ニューヨークなどと共に主要港のひとつに挙げられている点にも注目しておいていいだろう。

明治三十六年五月刊『文部省調査外国地名彙』におけるプリンディジに関する記載を重視するのは、小西謙「森鷗外作『舞姫』解 積上の一見解―主人公離欧の港プリンディジ―」（『作新女子短期大学紀要』第3号、昭和51年3月）である。同書ではプリンディジについて次のように記されているという。

伊太利南端にあり。其状靴状をなせる踵に位し、アドリア海に臨める小港なり。人口一万二千、欧州南部を走る鉄道幹線の終点にして、英国の東洋郵便線に当る。さればロンドンにて集めたる郵便物は陸路此地に送り、茲よりピーオー会社の汽船に搭載して、印度並に東洋諸国に送附するものとす

先述した鎌田栄吉『欧米漫遊雜記』にも、プリンディジについて「此港は三万の人口を有せる小市にして古代希臘人の殖民に依て起りしなり、定期船の之に寄港するは郵便物搭載の爲めなり」とあり、右の記載内容と符合する。

このことから分かるのは、古来、アドリア海の要港として知られていたプリンディジが、スエズ運河開通以降も中近東、インド、極東方面への海上交通の要衝であったという事実である。『舞姫』が執筆された十九世紀末の時点で、ヨーロッパからスエズを経て極東へと向かう航路の起点はマルセイユだけではなかった。小西は、プリンディジがもうひとつの起点であったことを指摘すると同時に、プリンディジから離欧した実例として、北畠道竜師、鳥尾小弥太の二人を紹介している。

こうした事実を踏まえれば、豊太郎がプリンディジから帰国の途についたことを例外的というわけにはいくまい。むしろベルリンからスイスを経てイタリア、プリンディジへと南下するその旅程は、小西の指摘するように、距離的にも経済的にもマルセイユを経由するルートよりも現実的なものであったといわねばならない。

もうひとつ、小西が指摘する重要な事実がある。それは、鷗外自身がスエズ運河開通以降のプリンディジの海上交通上の役割について認識していたということである。鷗外は明治二十二年三月から二十三年六月まで『東京医事新誌』『医事新論』に「コッホ師印度紀行抄」を訳しているが、その冒頭にはロベルト・コッホ一行がベルリンからインドへ向けて旅をするのに、プリンディジを通過して

いたことが記されている。「英国郵便汽車ニ乗テ此府（筆者注、ボローニヤ）ヲ発シプリンドイーヂーニ赴キ直ニ「モンゴリヤ」号ノ甲板上ニ移リシガ此船ノ岸ヲ離レシハ翌日ノ味爽ナリキ」。

川上俊之『舞姫』エリスの造形」（『鷗外』31号、昭和57年7月）もこの事実を指摘しており、鷗外がプリンディジについて知識を持っていたことは明らかである。たしかに鷗外がプリンディジを選ぶ（必然性）は十分にあつたといふべきであろう。

だとしても、こうした事実だけを、豊太郎の離欧の地がプリンディジに設定された理由とするわけにはいくまい。豊太郎の帰国のルートが歴史的事実に照らして現実的であるとしても、加えて、鷗外がプリンディジの海上交通上の地位を知っていたとしても、それだけでは（必然性）の説明として十分とはいえないからである。そうした外的条件面からだけでなく、（必然性）は『舞姫』という虚構作品の内的必然性としても説明される必要があるのだ。

三

なぜプリンディジなのか、改めて考えてみたい。そこで先ずこの問いを、なぜプリンディジなのかと裏返しとの関係にある、なぜマルセイユではないのか、と置き換えることにしよう。これまで確認してきたプリンディジをめぐる歴史的事実からして、豊太郎の離欧の地の候補は二つしかない。鷗外は往路も帰路もマルセイユを経由しており、自身の目と肌で体験している。プリンディジについては書

物からの知識だけであり、実体験はない。にもかかわらず、マルセイユではなく、体験的なりアリテイに欠けるプリンディジを選ばなければならなかった理由があるはずである。

マルセイユが選ばれなかった理由。それは作品の内的必然性という意味では、豊太郎の帰還の旅は既知の状況から始まってはならなかったということ以外には考えられない。

鷗外が、プリンディジから帰国の途についた豊太郎に課した状況をいま一度確認しておく。プリンディジを出航してから「早や二十日あまりを経」た現時点においても、日記が白紙の状態のままにある理由を豊太郎は、こう述べていた。

こたびは途に上りしとき、日記ものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のままなるは、独逸にて物学びせし間に、一種の「ニル・アドミラリイ」の氣象をや養ひ得たりけむ、あらず、これには別に故あり。

げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず、学問こそなほ心に飽き足らぬところも多かれ、浮世のうきふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言ふも更なり、われとわが心さへ変りやすきをも悟り得たり。きのふの是はけふの非なるわが瞬間の感触を、筆に写して誰にか見せむ。これや日記の成らぬ縁故なる、あらず、これには別に故あり。

豊太郎が日記を書けない理由として挙げたのは「ニル・アドミラ

リイ」と、他人はいうまでもなく自分の心が変化しやすいと悟ったことである。しかし言下に「あらず、これには別に故あり」と強く否定している。ここから確認できるのは、豊太郎が挙げている二つの理由が間違いであるということではない。「あらず、これには別に故あり」という二度にわたる強い否定のことはこめられているのは、要約を禁ずる断固とした意思にほかならない。

「ニル・アドミラリイ」が的外れかといえ、必ずしもそうではないであろう。免官になり、将来への不安を抱えこんでいた重苦しい日々の豊太郎の心中を推察すれば、日記を書けない理由の構成要素となつていたとしてもおかしくはない。一面の真実ではあつたはずだ。しかし、豊太郎は「ニル・アドミラリイ」を理由にすることを肯んじない。なぜか。豊太郎が否定しているのは、自己を語ることを喪失するほどの状況をもたらした原因を、「ニル・アドミラリイ」いう一語によつて要約する行為そのものであるからである。

繰り返すが、「ニル・アドミラリイ」は原因説明として間違つているとはいえない。だが、問題は「ニル・アドミラリイ」と要約することによつて、どのような事態が生じるのである。豊太郎の現在、ベルリンでのエリスとの出会いから別離までの歴史はもとより、その前史としての成育史、とりわけその人格形成を担つた母親との関係、さらには帰国に至るまでの天方伯や相沢謙吉との関係などが複雑に絡み合つてもたらされたものである。にもかかわらず、「ニル・アドミラリイ」として説明することによつて、事態は整理されるかもしれないが、そうした複合的要因を切り捨ててしまうこ

とになる。結果としてそれは、豊太郎を苦しめている「恨」の根源を突きとめることをも阻害することになるだろう。

説明困難な事態にたち至つたとき、既存のことはや概念で説明してしまえば、いち早く混乱や苦しみから抜け出すことが可能となるだろう。が、一方、既存のことはや概念——豊太郎の場合「ニル・アドミラリイ」という学術用語による説明は、単に事態を一般化しに過ぎない。しかも、一般化したことで事態の固有性や特殊性は無化されてしまう。そこに要約という行為の暴力性がある。「われとわが心さへ変りやすき」——自分の心の頼りなさ、この理由づけもまた事態を分かりやすく整序してはくれるだろう。しかし、分かりやすい一般的な現象に置き替えているだけで、渾沌とした事態が無色透明化され、本質を封印してしまうのは同じことだ。豊太郎は「あらず」とこれも退ける。

強いことばによる断固たる否定の繰り返し。そこから浮かび上がってくるのは、内奥に抱えこんでいる問題について、既存の概念を借りた安易な対象化はすまいという自身への戒めではないだろうか。言い換えれば、それほどまでにドイツでの体験が安易な要約を許さない痛切なものであつたということだ。いずれにせよ、既知への変換は許されない。ドイツでの体験を言語化するには、豊太郎は過去の記憶と対話しながら、葛藤の中から自分自身の責任において一語一語を紡ぎ出していかなばならなかつた。

鵬外が豊太郎の現在に設定しようとしたのは、このような未踏の状況である。「げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず」

と豊太郎はいう。その変貌の経緯についてはまだ、ここでは明らかにされない。ただ、明らかなのは「東に還る今の我」が向き合わなければならなかった事象は、これまでの経験知を適用できないものであったということである。豊太郎はそれ故、依拠する事例のないまま手記の執筆を始めなければならない。

四

依拠する事例のないままに未知の状況と対峙すること。鷗外が豊太郎に与えた課題は、そのまま鷗外自身の課題ではなかったろうか。自分を投影した太田豊太郎なる人物と同期して、その内奥の真実を描出するためには、『舞姫』の作者としての鷗外も同様に、経験知の通用しない世界に足を踏み入れる必要があったはずである。いうまでもなく、それは既存のことばや概念による説明を極力排することを意味しており、表現者としての鷗外に大きな転換を迫るものにはかならなかつた。なぜなら鷗外は「西に航せし昔」、既存の知や先例に依拠する表現者であつたからである。

明治十七年ドイツ留学に向かう際に書き記した渡航記『航西日記』を見れば明らかである。『航西日記』の記述の特色はさまざま過去の著作の引用と踏襲を積極的にしていることにある。大野亮司文責・山崎一穎校閲「『航西日記』解説」が指摘するように、「『航西日記』では語彙、修辭や文彩、記述対象の選択に関する既存の文献的な知への依拠によって記述が組み上げられていく」のである。具

体例を一つだけ確認する。サイゴンについての記述である（明治十七年九月七日）。

初七日の早、塞棍河を遡る。兩岸皆な平沢なり。艸木翳然たり。村舎点綴す。風景画のごとし。間に椰樹蘇鉄樹の甚だ大なるを見る。午後一時驟に雨ふる。詩有り。

寂寞漁村斷復連、夾舟深綠鎖輕烟。
喜他一陣椰林雨、乍送微涼至客船。

二時港に達す。香港より此に抵ること八百十五里。舟の入港するや、直ちに埔頭に接して駐す。然れども市街に赴く者、猶お三版を待つ有り。其の捷きを取ればなり。市街を瞻望するに、屋瓦皆な赤し。始めて椰子を試みたり。形西瓜のごとし。殻を解きて漿を得たり。味極めて甘美なり。其の殻は以て椀と為し盃と為すべし。此の日、軍医本部に報ずるに、香港にて病院を觀るの事を以てす。又た郷書を發す。

この部分が『特命全權大使米歐回覽実記』、成島柳北『航西日乗』や呉震方『嶺南雜記』などの先行する文献に描かれたことをなぞっていることは、『新日本古典文学大系明治編5 海外見聞集』（岩波書店、平成21年6月）の補注その他が指摘している。森岡ゆかり『文豪の漢文旅日記』（新典社、平成27年3月）は右の漢詩に注目し、成島柳北の『航西日乗』（明治五年九月二十五日）にある次の漢詩を踏まえたものであるという。

針路繁回入港門

長流一帶不知源

挾舟雲樹奇於画

誘得征人到塞昆

森岡がいうように、鷗外の「夾舟深緑鎖輕烟」が柳北の「挾舟雲樹奇於画」を踏まえたものであることは間違いないであろう。このように、引用と踏襲によって先行する既存の知に依拠する記述が『航西日記』には多く見られる。しかも、こうした記述方法を採用していたのは鷗外だけではない。引用と踏襲は当時の渡航記の記述方法における、いわば作法であったのだ。その点では何ら問題とするには当たらないであろう。しかし、それはあくまで「渡航記の記述方法としては」という限定付きのものであって、豊太郎の手記となると話は別である。豊太郎の手記の記述方法としては誤りだろう。

山崎一類（『森鷗外 国家と作家の狭間で』新日本出版社、平成24年11月）は渡航記の作法の意味を次のように解説する。

名所・旧跡といった歌枕的な場所や、その場所に関する歴史上の人物に先人たちは漢詩（詠史詩）を詠んでいる。鷗外も例外ではない。それが当時の渡航記の定型である。常に先人たちの知の踏襲や引用が、見聞の事実を保証し、読者に安心感を与える。

古典的な紀行文の作法にも通ずる渡航記の作法に倣うことで、たしかに渡航記としての信頼性を高めることになるだろう。典拠から引用され踏襲された類似の表現の積み重ねは、記述内容の事実らしさを生み出していくに違いない。だが、先行する記述を踏まえて記すということは、記述内容にバイアスがかかることを意味する。引用や踏襲とは、他者の眼、他者の認識の枠組みに依存して対象を把握することだ。記述者として眼前の事象と純粹に対峙しているとはいえない。出会った光景や事象、体験した事象を自分自身の眼を通して記述していても、すでにそのまなざし自体が制度化されてしまっているからである。

この現象は、柏木博『肖像のなかの権力』（平凡社、昭和62年8月）が指摘する、絵葉書によるまなざしの制度化と同種のものである。柏木によれば、明治時代、複製メディアとしての絵葉書が大衆の間に流通したことで、風景をめぐる逆転現象が起きたという。事前に絵葉書を見た人々が絵葉書に写し出された風景を求めて、というよりその風景を確認するために旅行に赴くようになった。絵葉書は大衆の視覚を拡大させた一方、「現実の場所よりも先に複製によって、特定の場所をあらかじめ体験させてしまう」ことで、大衆の「風景を見る視点を固定した」のである。

鷗外の場合、厳密には柏木のいう逆転現象に当てはまらないかもしれない。鷗外はあらかじめ体験した場所を求めて航西の旅に出たわけではない。しかし、『航西日記』の記述を見る限り、寄港地の

風景と事物に向けられたまなざしには、明らかなバイアスがかかり制度化されている。森岡ゆかりは『航西日記』には「既出のものを踏まえた表現がちりばめられていて、鷗外は自分の感想を用心深く隠しているのではないかと思うほどです」と評しているが、引用と踏襲という記述方法が保証するのは、先行する既存の知の枠内での体験であり、それは実質的には先行文献から得た知識の確認を指しているのだ。

『航西日記』の記述方法が豊太郎の手記に相応しくないことは、すでに明らかだろう。豊太郎が記述しようとしていたのは、先行する既存の知の力を借りて片付けようとしても片付くことのない混沌だったからである。鷗外は自分と同じようにドイツ女性と親しい関係結びながら、帰国に際して別離を果たした石黒忠恵を身近に知っていたし、他にも同様の事例は見えていたはずである。しかし、そうした他者の事例を参照項とする方法を選択しなかった。あくまで分身である豊太郎と同期しながら、虚心に過去と対話する道を選んだのである。そこに『舞姫』という作品のリアリテイと誠実さが保証されているとはいえないだろうか。既知のマルセイユではなく未知のプリンディジを選んだのは、表現における未踏の領域に足を踏み入れる鷗外の覚悟を象徴するものであったろう。

ところで、いま『舞姫』の誠実さについて指摘したが、これには異論が出るかもしれない。豊太郎は過去との対話において痛切な悔恨を綴ってはいるものの、実のところ自己弁護や保身に腐心しているのではないかという疑いがあるからである。たとえば山崎一類は、

豊太郎の「恨」が「一抹の雲の如」き状態から「世を厭ひ、身をはかなみて、腸日ごとくに九廻す」という激しい心の痛みとなり、いまや悲しみと痛恨の思いが内部に深く沈潜し結晶していることについて、こう論破する。³⁾

本来ならば「腸日ごとくに九廻す」という激しい心の痛みは、豊太郎が発狂したエリスを直視した時覚えなければならぬものである。「エリスが生ける屍を抱きて千行の涙を濺ぎしは幾度ぞ」には、豊太郎の哀れな狂女への同情はあっても、自責の念は薄い。鷗外の筆は慎重に豊太郎を庇っているのである。

その通りであろう。「わが心はかの合歓といふ木の葉に似て、物触れば縮みて避けんとす」——豊太郎は心の弱い、臆病な人間と自己分析する。その性格的な弱さゆえに受動的な生き方をしてきたことが、やがてエリスとの別離を誘引することになるのだが、問題は最初から最後まで「弱き心」で押し通してしまっているところだとも山崎は指摘する。たしかに、豊太郎は自分の身に起こった一連の出来事の原因を「弱き心」という一語に集約しているところがあり、「弱き心」に居直っていると解釈されても仕方がないであろう。豊太郎の自己分析から自責の思いが伝わってこないのも当然である。この点だけを見れば『舞姫』は誠実なテクストとはいえない。

だが、誠実さは書くという行為自体が保証しているのだ。書くという行為は、豊太郎の保身を、そして豊太郎を庇いたい鷗外の企み

を許さない。むしろそれぞれの思惑を裏切っていく。豊太郎にとつて手記を書くという行為は、悔恨の思いを綴ることで傷ついた心を慰撫し、なおかつ自身を心の弱い、臆病な人格として囲い込むことによつてエリスへの裏切りの免責を図ることに、その狙いがあった可能性は否定できない。しかし、その書くという行為が皮肉なことに、意図に反して豊太郎の狡さを暴き出してしまっている。豊太郎は要約を自らに禁じていた。その決意をもつて、エリスが発狂に至った経緯とその間の心情を詳細に語ろうとした結果、豊太郎のもうひとつの真実が包み隠しようもなく浮かび上がってきた。自己弁護に走る人間であること、自責の念が薄いこと。本来は隠蔽しておきたい不都合な事実をも本人の意図せざるうちに開示してしまう。それが書くという行為に潜む不可避の機能ではあるまいか。要約を禁じて書き継がれた『舞姫』は、その意味で誠実なテキストであるといえよう。

注

- (1) 『新日本古典文学大系明治編5 海外見聞集』所収。
- (2) 書き下し文は、森岡ゆかり『文豪の漢文旅日記』による。
- (3) 「舞姫注釈」(『Spici』森岡外)、有精堂出版、平成2年4月)